

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow



Takashi Aoyagi

1979年東京都生まれ。実家は浅草の書道用品専門店「宝研堂」。祖父と父が硯を彫る姿を見て育ち、大学生の21歳の時、祖父の他界を機に父に弟子入り。以後、卓越した技を継ぐべく修業に没頭。



硯(すずり)

墨を水で擦り下ろすための道具。新石器時代に中国で誕生し、初めは自然石や陶器などが使われていたが次第に石を削って作る石硯が主流となる。日本でも室町時代に石硯がつくられるようになり、その産地は全国に広まった。



日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE WebやTVなどお楽しみいただけます。

Web版

パソコンやタブレットでもご覧いただけます。本紙掲載以外に、多数の若者たちをご紹介します。

アットホーム明日への扉



TV番組

ディスカバリーチャンネル (CS)

冠番組

「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!!

最新号のご案内

No.063 / 伊勢根付職人 梶浦 明日香 氏

製せい

硯けん

師

青柳 貴史 氏

趣深く、墨が心地よく
擦り上がる硯づくりを究める。

紙、筆、墨とならび、書道の世界で文房四宝と呼ばれる道具の一つ、硯。石を彫ることのでつくられる硯は、手入れさえすれば半永久的に残ることから美術品としての鑑賞にも堪える。

青柳貴史さんが勤める宝研堂は、昭和の初めより文房四宝を扱い、伝統を守る老舗。家業に就こうと決心したのは、大学三年生の時だった。

きっかけは？

青柳「病に倒れた祖父が、病室で硯の彫り方を私に教えようとしたんです。その姿を見て一日でも早く仕事を覚えたいと思い、大学を中退して父に弟子入りしました」

修業に明け暮れる中で、ずっと大切にしてきた石がある。その肌が赤子のそれのように滑らかなことから硯材として珍重され、今では希少な老坑とい

う中国生まれの石だ。自らの成長を知るため、惜しくて手をつけられずいた老坑に、命を吹き込むことに決めた。

良い硯とは、石の美しさを生かしたデザイン性と、実用性が高レベルで両立した物をいう。原石の趣を損なうことなく、いかに使いよい硯に仕上げるかが腕の見せどころだ。

一度彫ると石は元に戻せない。出来映えはもとより手に持った時の感触を熟考し、ようやくノミを入れた。彫っては撫で、手触りを確かめながら頭に描いた形に近づけていく。「隙」をつくることにもこだわった。きれいな過ぎるよりも、ある程度ノミの跡が残っている方が使いたいという気にさせるからだ。

佳境は表面を砥石で磨き、鋒銚ほうせうを立てる工程。鋒銚とは微細な凹凸のことで、それがより小さく、均一に立つ硯ほど力を入れずともきめ細かく、伸びのよい墨が擦り上がる。また、石の密度が高い老坑は鋒銚が減りにくく、心

地よい擦り味が長持ちする。苦心の末、自然美と造形美が調和する中に、使いよさが際立つ硯づくり上げた。

これからの抱負は？

青柳「たくさん仕事をする事です。石の形や性質によつて彫り方はさまざま、そこに正解はありません。良い硯をつくれるようになるには経験を積み、体で覚えていくしかないんです」

祖父の思いを受け継ぎ、日々研鑽を積む若き職人は、いつか後世に残される硯を生み出すにちがいない。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づけ。

※2014年2月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!! 伝統の硯づくりに挑む姿を動画で詳しく紹介しています。ぜひご覧ください。